

下伊那のスマイレ

浜 栄 助

B. Hama: Notes on Viola from Shimo-Ina District (Nagano)

スマイレ王国日本のスマイレに魅せられて、筆者は昭和30年以来、その分類学的研究を主体に研究を続け、今日まで我国のほぼ全種類につき観察を終了した。その間調査に歩いた全国各地のスマイレ群の生育分布を比較してみても一驚するのは、スマイレ王国日本の中でもこの信州はかけはなれて種類と個体数に恵まれているということである。調査不十分のため未だに長野県全体のスマイレ属をまとめる段階にいたらないが、たとえば一応調査を完了した諏訪地方3市1郡だけでも26種、4変種、26品種、25自然雑種の計81品のスマイレを確認している。駒田暢男氏が調べた西日本としては種類の多い方に属する熊本県全体のそれが27種、4変種、16品種、2雑種の計49品であるので、如何に信州はスマイレ天国であるかが容易に推察できよう。

ところで筆者は42年4月、諏訪より下伊那最南端の阿南高校に転任してスマイレの春を迎えたが、1、2回調査に歩いただけで、それだけ多い長野県にもかかわらず下伊那南部特に天龍川沿いの地域は誠に種類と個体数に乏しいということに気がついた。一般にスマイレ属は暖地のシイ・タブ帯には少なく、より寒いクリ帯やブナ帯に多いが、それにしても諏訪や上伊那、木曾に比較し下伊那のそれは目立って少ない。そしてこのことは、県内産のいくつかの種類が伊那谷のどこかで南限となり途中で分布しなくなるか、または主に気候的要素により分布はしても個体数が減少することを意味するものとみてよく、ここに下伊那のViola調査の重点がおかれなくてはならない。また一方では、愛知、静岡の南方から北上してきている暖地系としてもよい西南日本型や太平洋側主産型の各種類についてはその北限をつきとめる必要がある。

先に横内斎は昭和29年、長野営林局報才21号で伊那谷の暖帯系植物の分布について論説し、各種の暖温植物両帯の境を年平均気温12℃の線に引いたが、果してスマイレ類の場合にもこのような現象がみられるであろうか。3ヶ年の僅かな期間であるが筆者自体の調査に、御好意によって提供された飯田市立石村松光喜氏の多年にわたる多大な採集品と記録とを併せ、一応整理できたので次に記してみたい。全国的な観点から下伊那に分布しないものについても※印を付してふれてみることにする。

I 普遍型 (タテツボスマイレ型)

長野植研・3号・1970年4月

Bull. Bot. Soc. Nagano 463 Apr. 1970

北海道から九州、南西諸島まで広く分布し、下伊那でも、もっとも普通にみられる仲間である。

1 タチツボスミレ スミレ類の少ない下伊那にあって、これだけはいたる所にあり早春の野辺にぎやかに飾っている。f.としてはアカフ(マダラ)タチツボスミレ、ウラベニタチツボスミレ、オトメスミレ、シロバナタチツボスミレ、ケタチツボスミレが見られるが、特に葉の色が紅色をおびているウラベニタチツボスミレの多いのが下伊那の特色であり、葉だけでなく莖をもふくめ全体がほとんど紅色といってよい程の個体もある。たゞし花後紅色は次々にうすれる。ミドリタチツボスミレも検出されているが、これは花が葉形化して緑色となった奇形品である。

2 ニオイタチツボスミレ 同じ普通型でも上伊那に比べるとはるかに個体数が少なくなっている。一般に山地に多い。

3 アオイスミレ もっとも花期の早いもので注意しないと気のつかぬ中に花期が終る。個体数は多くはないが点々と分布する。形態を同じくする古くからの外来品であるニオイスミレも所々の家に残っており、これは更に花期が早く12月頃から咲くものもある。

4 ニオイスミレ(ツボスミレ) 分布は普通である。f.に淡紫花の※ムラサキコモノツメ、紫条が全くない純白の※シラユキスミレがあるが下伊那では確認していない。var. のアギスミレは湿地に多く、同じくvar. の※ミヤマツボスミレは北アルプスなど日本中部から東北に及ぶ高山型であるが、南アルプスの高所のものは何れも普通の型で、ミヤマツボスミレの型はない。

5 アカネスミレ 下伊那では路傍沿いなどにかなり個体数が多いが諏訪、木曾等に比較すると遙かに少ない。白花品のf.コボトケスミレも富草や神原でみつけれられている。※f. オカスミレはアカネスミレの無毛型である。オカスミレの全国的な分布については従来ほとんど注目されていない。筆者は長野県内にアカネスミレは量産するのにオカスミレは全く目につかないところから、このスミレの分布に興味をもち全国的に調査した所、近畿、中国、四国、九州ではオカスミレはアカネスミレよりも非常に少なく、東海、関東ではアカネスミレ同様普通に分布することが判明した。両者の生育状況は全く混生する場合と、ほぼ場所を別けて生育する場合と両様あり、またアカネスミレはかなり高地にまで生育するのに対し、オカスミレは高地には少ないものである。これらのことからオカスミレが若し県内に生育するとすれば伊那南部か木曾南部がもっとも可能性があると考えられるが現在発見するに至っていない。

6 スミレ タチツボスミレ同様、畑や石垣などに広く分布する。有毛のものをケスミレ、無毛のものをケナシスミレというが完全無毛型はほとんどない。白花品であるシロガネスミレも記録されているがシロスミレと混同される恐れがあるのでその何れであるか確実でない。

Ⅱ 準普通型 (ノジスミレ型)

東北から九州南部または南西諸島までの、主に低地の人間居住地域とその周辺に生育する人間臭

い仲間である。

1 ノジスミレ スミレと形態がよく似ており混同された関係からか従来県内における記録はほとんどなかった。筆者の調査によると各地にかなり多く生育している。スミレよりも開花期がかなり早く、またスミレの根が褐色であるのに対しノジスミレのそれは白色である。飯田の教育会館の中庭に見事に増殖している。f のケナンノジスミレもみられる。

2 ※アリアケスミレ 太平洋側や日本海側の沿岸部低地の水田の周囲など、水分の多い所に生育する白花で紫条のあるスミレである。内陸部中央高地性のシロスミレとは生育を完全に分けている。県内では未だ確認されていないが分布はないものと思われる。

3 ※ヒメスミレ 標高0~500m(300m位までが多い)の低地性のもので、九州から東北にかけての太平洋側及び日本海側に分布し秋田市が北限とされている。県内ではもし生育があるとすると新潟県からの千曲川沿いか、岐阜県からの木曾谷か、静岡・愛知からの伊那谷に限られると思うが、奥原弘人や筆者の調査では目下の所未発見である。

4 コスミレ 下伊那では各地の人家付近の石垣などにやや普通である。花後のものは無毛型のノジスミレと誤認されやすいので同定は花時のものの方が確実である。

Ⅲ 日本海側少産型 (エイザンスミレ型)

東北の主に太平洋側から、関東、中部、近畿と主に太平洋側を通り、九州南部または南西諸島北部にまで分布する仲間で、東北から中部にかけては日本海側に少ないことが特徴である。

1 エイザンスミレ 複葉性のスミレで、果時には小葉になるのが普通である。下伊那でも各地に見出されており、シロバナエゾスミレもある。単葉性の※ヒトツバエゾスミレの記録もあるが、ヒトツバエゾスミレは関東の一部に限られた特殊なもので、県内には分布していない。

2 ヒゴスミレ エイザンスミレよりも小葉の各裂片が更に細かい複葉性のもので、花もより小形な白色花である。下伊那では新野、根羽、神原、鹿塩など数個所で見出されているだけで、エイザンスミレよりはるかに個体数が少ない。

3 フモトスミレ 全体小形、花も白色または部分的に淡紫色の入った小形のもので、下伊那ではいたる所の山地林内に数多く見られ、葉の表面に白斑のあるフイリフモトスミレも多い。他の地域のものに比べ葉の大きくなるものが多く、このため時にゲンジスミレなどに誤認されたりする。なお、フモトスミレは形態に変異が多く、名称に似ず垂直的分布域が広く、海岸から標高2200m位の高地にわたって生育する。

4 マルバスミレ 諏訪、下伊那ではかなり普通にみられるが、下伊那では個体数が急激に減少し、特に南部ほど少ない。莖葉などに毛があり、従来ケマルバスミレとよばれてきた。

Ⅳ 東北日本多産型 (サクラスミレ型)

北海道南部から東北にかけての主に太平洋側、関東や中部の主に中央部と太平洋側に多く分布し、近畿、中国、四国には少なく、九州の主に北部と中央部に再び多くなる仲間で、県内では標高の低い所には余り見られない。

1 サクラスミレ (図1) 本州中部では海岸をはずれた中央部に東西に分布しているため、長野県では北部と南部の分布が問題となる。長野市以北や大糸線小谷方面の県北部には分布しないかまたは少産する程度で、新潟県に入ると見られない。県の南部では下伊那の大鹿から飯田、阿智を結ぶ線が南限と思われる。たゞし南アルプスの山沿いや恵那山近辺は調査の必要がある。なお、サクラスミレは垂直的には800~2000mに多い。

2 アケボノスミレ 本県ではほとんど全域にわたって分布するが標高800~1900mの山地に多く、500m以下の低地には少ない。シロバナアケボノスミレも見出されているが希品である。

3 ヒナスミレ 垂直的には標高300~2100mとアケボノスミレよりも更に広く分布し、下伊那では針葉樹林下などに多く、フイリヒナスミレもある。個体数では諏訪、上伊那等に遠く及ばない。

4 ヒカゲスミレ (図1) 東北から長野県までは多産するが、岐阜県以西は急激に少なくなる。県内では北はほとんど新潟県境まで分布するが、南はほぼ上伊那南部までで、大鹿から南木曾を結ぶ線が南限の模様である。下伊那にも採集記録があったが、標本を検討の結果それらはコスミレ、アカネスミレなどの誤認であることを究明した。しかし花時における詳細な調査を必要とする。大鹿方面には、タカオスミレやハグロスミレも見られる。

V 北海道限産型 (エゾキスミレ型)

北海道のみに生育する※エゾキスミレや※シノユウキスミレの仲間である。

VI 東北日本型 (エゾノタチツボスミレ型)

東アジアや北半球の冷温帯や、亜高山、高山に生育する仲間で、日本では北海道から東北中央部、中部の中央部まで分布する仲間であるが、一部の種類は更に近畿、四国、南西諸島にまで及んでいる。

1 エゾノタチツボスミレ (図1) 白花のものと紫花のものがあるが、命名基準は白花品であるので紫花品はムラサキエゾノタチツボスミレとして小泉秀雄の *f. purpurea* をとりたい。日本中部の分布は本県が主体で岐阜県は少産、滋賀県の伊吹山が西限とされている。下伊那においては生育の南限が問題となる。木曾谷の南限は南木曾町那木野(奥原弘人による)とされているが、それから東側に移り木曾山脈の部分は不明、伊那谷に入り清内路、会地、三穂、下条のひさわ、泰阜北部、千代と、東に移るほど南下しているようである。なお静岡県での分布は北部山岳地帯と伊豆半島の一部とされている(杉本順一による)ので、恐らく伊那山地南部から木沢、八重河内と南

アルプスの山地に沿って南下し、静岡県北部に連絡するものと思われる。たゞし、平谷、兎木、新野などの南部高冷地は更に調査が必要である。

2 シロスミレ (図1) 北海道から本州の中央部を走り、岐阜県荘川村や高鷲村を西限とする白花のもので、スミレによく似た形態であるが、距が緑白色で短く太く、また花弁がまとまって咲く特徴がある。スミレの白花品のシロガネスミレを誤認することもあり注意を要する。県内では北部の上田から豊科の線以北には分布がなく、南部では木曾御岳付近、伊那では飯田近辺から大鹿の辺が南限と推定されるが更に調査する必要がある。新野峠、兎木峠産の記録があるが筆者の調査では見出し得なかった。恐らく誤認であろう。

3 エゾアオイスミレ 従来アオイスミレと混同して認識されていた関係から、全国的に分布の調査がほとんど進んでいないが、北海道から東北を経て中部の中央部に分布し、恐らく本県が西限かと思われる種類である。アオイスミレとほとんど同一形態であるが一般に匍枝を出さないこと、葉の先端がとがること、アオイスミレよりも一般に高所(標高800~2200mに多い)に生育することなどで区別できる。大鹿産の標本があるから大鹿、飯田市北部、木曾の南部が本県における南限かと思われる。

4 ウスバスミレ (図1) 北海道から中部にかけての高所(中部では1800m以上)に生育し、伊那では中央アルプスや南アルプスに知られている。従来までの調査では南アルプス赤石岳が県の南限であると共に日本の南限である。

5 ※タカネスミレ 北海道、東北の一部、および中部の何れも高山に生育し、中部では北アルプス、八ヶ岳、中央アルプスの標高2600m以上に分布する。北アルプスでは朝日岳から穂高岳がその生育範囲と推定され、乗鞍や御岳には見当らない。中央アルプスでは木曾駒ヶ岳の記録があるが分布しないという説もあり、筆者は未だ確めていない。八ヶ岳には赤岳を中心として生育する。従来南アルプスにも小泉秀雄「日本南アルプス寒地植物誌」にみられるようにかなり広範囲にわたって生育しているとされていたが、近時その存在の有無が論議の対象となり、最近になって井波一雄、植松春雄、古瀬義、杉本順一などにより詳細に調査された結果全く分布しないことが確認された。筆者の点検した下伊那教育会所蔵の標本にもタカネスミレは一品もなかった。南アルプスの頂上近くの砂礫地に生育するキバナノコマノツメは葉質が厚く、一見タカネスミレ状であるためしばしば誤認されてきたものと思われる。キバナノコマノツメは葉面に散毛があり、タカネスミレは極く稀の場合を除いては完全無毛であるので区別がつく。檜山樫三により検出された至仏山のタカネスミレも水島正美などその後の調査によればやはりこうした厚目の葉をもったキバナノコマノツメであることが判っている。とも角、日本におけるタカネスミレの南限は目下の所、木曾駒ヶ岳、八ヶ岳ということになる。

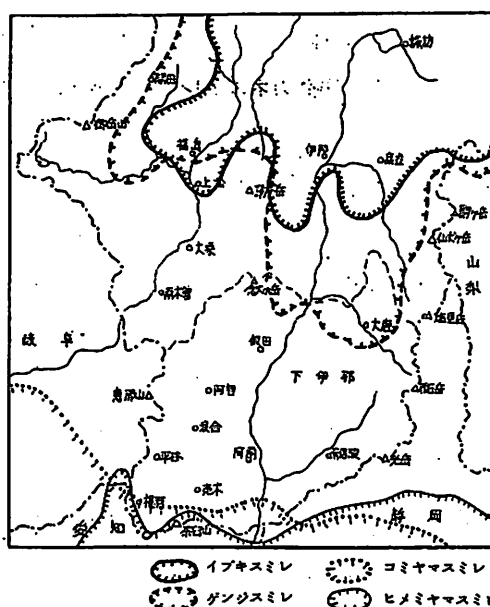
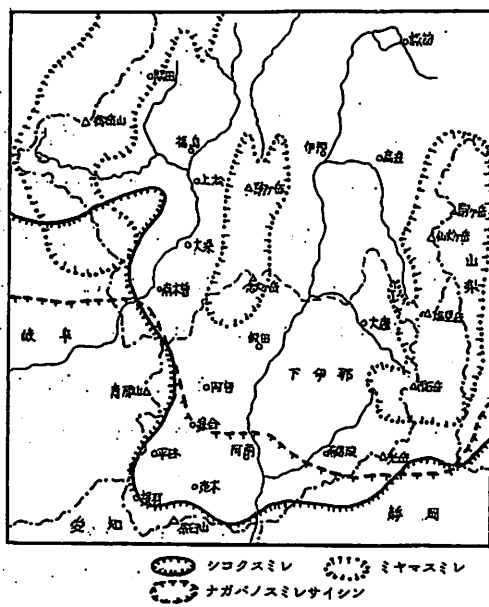
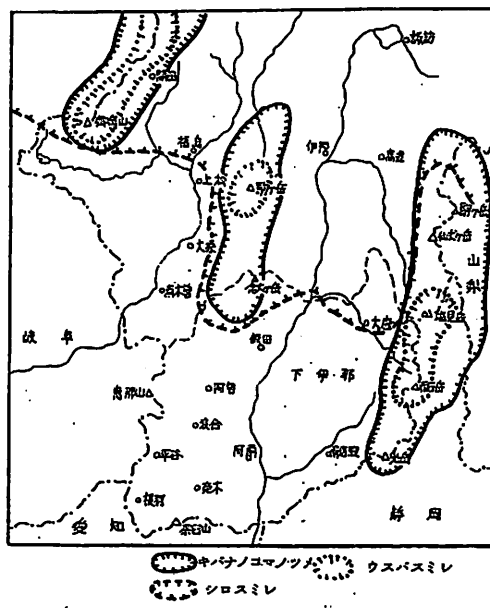
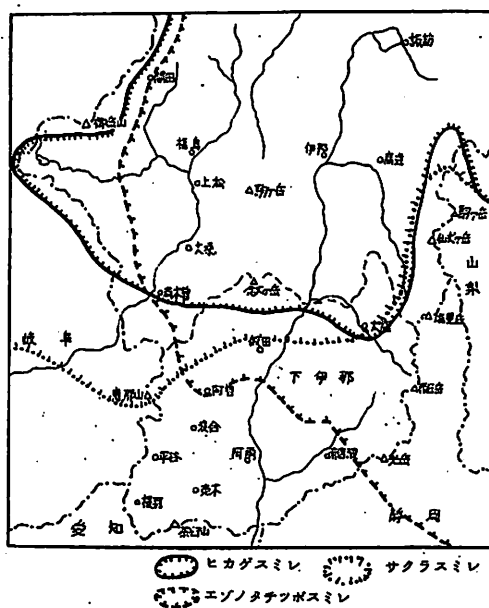


図1 下伊那地方におけるスミレの分布

6 キバナノコマノツメ (図1) タカネスミレよりもはるかに分布域が広く北半球の冷温帯一帯に産し、日本でも北海道、東北、中部から屋久島まで生育し、個体数も多い。下伊那では木曾山脈、伊那山地、南アルプスの標高1800~3100mにわたって存在するが、南限即ち本州における南限は南アルプス池口岳と思われる。

7 ミヤマスミレ (図1) 北半球冷温帯に広く分布し、日本では北海道から中部まで生育する。北海道では海岸近くの低地にもみられるが、本県ではほぼ1100~2400mにわたって生育する。下伊那では中央アルプス、伊那山地、南アルプスに存在し、南限すなわち日本の南限はウスバスミレ同様赤石岳と思われる。なお日本における西限は白山とされている。最近四国の剣山にミヤマスミレと思われる産出があり調査中である。

8 マキノスミレ 上記1~7の各種に比べると例外的な特殊例である。マキノスミレは青森県上北部から兵庫県六甲山まで分布し、西日本には産出しないが、六甲山以西は母種であるシハイスミレ(狭義)となって連続しているので広義のシハイスミレとしてみた場合には普通型に属すべきものである。県内におけるマキノスミレは標高600~1300mの範囲に比較的広く分布するが、長野市以北の北信と諏訪南部にはみられない。下伊那では天龍川以東はほとんどなく(静岡県は非常に少ない)天龍川以西の山地に多く、愛知県に連続している。なおマキノスミレ、シハイスミレ(狭義)の混合地域である近畿から中部にかけてと、東北の一部にはマキノスミレよりもシハイスミレに似たものも所々にあり、中には両者の完全な中間型さえあり、このスミレの系統は複雑である。たゞし西南日本産の標準型のシハイスミレは中部以北にはない。

Ⅶ 日本海側主産型 (スミレサイシン型)

北海道の主に西南部から東北の日本海側と中央部、北関東、中部から近畿にかけての日本海側だけに生育する仲間、筆者の調査では積雪量と多分に関係があり、雪の多い地方に分布する。種類としては※スミレサイシン、※オオタチツボスミレ、※オオバキスミレ、※ナガハシスミレなどで、勿論下伊那には全く生育しない。

Ⅷ 太平洋側主産型 (ナガバノスミレサイシン型)

九州、四国、近畿中南部、中部南部から一部は関東南部に及ぶ太平洋沿岸地帯に分布するいわゆる襲速紀要素ともよばれる植物群にふくめてよいと思う仲間である。これらのスミレは岐阜、愛知、静岡方面から県内に入りこんでいるので、それぞれについて特に北限の調査が課題となる。

1 ナガバノスミレサイシン(図1) 裏日本積雪地帯に生育するスミレサイシンと対称的に太平洋岸に分布しており、東限は目下の所、茨城県西金砂山である。花は淡紫色、太い根莖をもつ。北限は木曾谷の南木曾町から浪合、阿南町、南信濃村和田の線と思われ、下条山脈八尺山における採集が下伊那の最北限である。標高50~1300mにわたるが、300~900mのスギ、ヒノ

キなどの針葉樹林内や林縁に多い。

2 シコクスミレ (図1) ナガバノスミレサイシンと同じく関東西部以西の太平洋岸のスミレであるが、標高600~1500m、特に900~1300mの山地に多く、生育は散在的である。本県では分布の北限が問題となるが、木曾では上松町以南の木曾川西部に生育し、南下して南木曾町南部から下伊那に入り恵那山へとび、更に南下して茶臼山に分布し、天龍川を越して熊伏山に産出している。

3 コミヤマスミレ (図1) シコクスミレとほぼ同じ分布範囲で福島県平市が東限、屋久島と種子島が南限である。シコクスミレと同じく山地のしかも多くは溪流沿いの湿地や水分の多い場所に藓苔類に混じて生育する。本県では南部にわずかに入りこんでいるものと思われるが調査が不十分で、木曾南部では記録がなく、下伊那では昭和33年6月、新野の丘草クラブのメンバーが、阿南町平沢で採集したのが唯一の記録である。ただし、平沢の現地はその後の台風で崩壊されたため絶滅し、現在は見当たらない。

4 ヒメミヤマスミレ (図1) フモトスミレに似た小白花をつける山地性小形の種類で、東限は箱根山、南限は屋久島とされている。木曾、伊那地方にはヒメミヤマスミレともフモトスミレとも判断しがたい型が所々に存在しているが、それらはほとんどフモトスミレに属すべきもので、ヒメミヤマスミレとはっきり同定できる型は生品でも標本でも筆者の調査の範囲には無かった。たまたま昨年、中山列氏から下伊那南端の茶臼山のスミレの同定を依頼されたのがきっかけで調査した所、同山には典型的な葉形をもつヒメミヤマスミレが著しく群生していることが判った。ただし、同山のそれは花が淡紫色をなす点が特異でこれは西日本のヒメミヤマスミレには見当たらない。杉本順一等はトウカイヒメミヤマスミレと呼んでいる。何れにせよヒメミヤマスミレが下伊那南部には分布していることが確認された訳で、更に今後の調査が必要とされる。

5 ※キスミレ 満州、朝鮮と共通的なもので、日本では隔離的に分布し、東限は静岡県韭山村で山梨、静岡、愛知などに散在し、南限は鹿児島県霧島山である。県内では未だ見出されていない。

Ⅷ 隔離型 (ゲンジスミレ)

満州、朝鮮などに生育し、飛んで日本では隔離的に分布している仲間である。

1 ゲンジスミレ (図1) 日本では山形県北部から青森県の一部にかけての地域、長野から山梨及び群馬の地域、岡山県の一部、愛媛県の一部の計四ヶ所に隔離して存在し、それらの中では本県を中心とする地域がもっとも広く、東は群馬県利根郡から埼玉県西部、山梨県東部にまたがる。本県では北は長野付近、中信と南信北部に多く、南限は木曾谷では原野から木曾福島辺までの模様である。下伊那では従来、フイリフモトスミレなどと混同されていたため調査が不十分であるが、ほぼ飯田と大鹿を結ぶ線と推定される。詳細な調査が必要である。

2 イブキシミレ (図1) 日本では青森の一部、岩手、宮城、長野を中心とする中部、滋賀県の伊吹山、岡山と広島にまたがる中国山地の一部に知られている。県内ではゲンジスミレとほぼ同じく北限は長野市付近と思われる。南限は木曾では木曾福島町(奥原弘人による)であるが、伊那谷では、下伊那での採集記録が無いので上伊那南部までではないかと推定される。尚中部における垂直分布は700~1500m位で、山地に多いが人家付近にも生育する。

X 中部日本型 (ヒメスミレサイン型)

長野県を中心とする本州中部にだけ生育するものでフォッサマグナ要素とよばれている。※ヒメスミレサイン ※タデスミレなど何れも下伊那にはない。

XI 西南日本型 (ナガバノタチツボスミレ型)

中部地方の太平洋側から近畿、中国、四国、九州に分布する群で長野県においては南部における分布が問題となる。

1 ※ナガバノタチツボスミレ 中部地方南部では、愛知の中南部から静岡のほぼ大井川以西の中南部に生育し、とんで伊豆半島の蓼山や大仁に及んで終っている(杉本順一)。ニオイタチツボスミレと、特に花後の葉においてよく似ており誤認されるので注意を要する。木曾谷南部における記録があるが、奥原弘人と筆者の調査では未確認で、分布しないと思われる。下伊那南部にも見当らない。従って県内には生育がないものと判断している。

2 ※コタチツボスミレ ナガバノタチツボスミレと同様な分布を示すが、分類学上タチツボスミレの小形品と、コタチツボスミレとの区別が明確でない現状から日本各地で全く混同されており調査が不十分である。標準品である関西型のコタチツボスミレは愛知から静岡に入り水窪町付近が東限とされている(杉本順一)。木曾谷、伊那谷南部には多分に分布する可能性もあり、木曾谷では記録もある。しかし筆者の調査では木曾、下伊那南部の何れにおいても小形のタチツボスミレのみで、西南日本にみられるような典型的なコタチツボスミレは見あたらない。

3 ※シハイスミレ 近畿以西に多い。中部では岐阜中南部、愛知全体に分布するが、静岡では小笠山に存在するだけである(杉本順一)。かわってvar. マキノスミレが東北まで生育する。県内では木曾、伊那、両南部ともに見当らないが、上伊那から諏訪にかけて、関西の標準型のシハイスミレとは異なるが、明らかにシハイスミレの一型に入れるべき紫背のスミレが分布している。

XII 南西諸島型

九州南部から南西諸島にかけて、または南西諸島だけに分布する仲間の ※ツクシスミレ、※ヤクシマスミレ、※ヤエヤマスミレ、※オキナワスミレなどである。

XIII 自然雑種

現在の所、下伊那で確認された自然雑種は皆無であるが、今後の調査によりいくつか見出される

可能性がある。

摘

要

1. 下伊那地方で昭和45年2月現在までに判明したスミレ属を整理すると23種、1亜種、4変種、18品種の計46品となる。これは諏訪地方を始め県内の各地方に比べるとかなり少なく、かつ、それぞれの種類の個体数も一部のものを除いては貧弱である。
2. 下伊那地方で分布上注目しなくてはならないスミレとしてはその南限が問題となるサクラスミレ・ヒカゲスミレ・エゾノタチツボスミレ・シロスミレ・エゾアオイスミレ・ゲンジスミレ・イブキスミレ、南限及び下限（標高の）が問題となるウスバスミレ・キバナノコマノツメ・ミヤマスミレ、及び北限が問題となるナガバノスミレサイシン・シゴクスミレ・コミヤマスミレ・ヒメミヤマスミレ・ナガバノタチツボスミレ・シハイスミレ・オカスミレ など今後のより完全なる調査が必要とされる。

下伊那産スミレ属目録

Sect. DISCHIDIUM Gingins キバナノコマノツメ節

Viola biflora Linnaeus キバナノコマノツメ

Sect. BILOBATAE W. Becker ニョイスミレ節

V. verecunda A. Gray ニョイスミレ

var. *semilunaris* Maximowicz アギスミレ

Sect. PATELLARES (Boissier) Nakai ミヤマスミレ節

V. mandshurica W. Becker スミレ

f. *glabra* Hiyama ex F. Maekawa ケナシスミレ

V. Patrinii A. P. de Candolle シロスミレ

f. *glabra* F. Maekawa ハダカシロスミレ

V. yedoensis Makino ノジスミレ

f. *glaberrima* F. Maekawa ケナシノジスミレ

V. japonica Langsdorf ex Gingins コスミレ

V. hirtipes S. Moore サクラスミレ

f. *rhodovenia* Hiyama ex F. Maekawa チシオスミレ

V. phalacrocarpa Maximowicz アカネスミレ

f. *chionantha* Hiyama フボトケスミレ

- V. Keiskei Miquel マルバスマイレ
- V. variegata Fischer ex Gingins
var. nipponica Makino ゲンジスマイレ
- V. yezoensis Maximowicz ヒカゲスマイレ
f. discolor Hiyama タカオスマイレ
f. sordida Hiyama ハグロスマイレ
- V. chaerophylloides W. Becker
f. Sieboldiana F. Maekawa et Hashimoto ヒゴスマイレ
- V. eizanensis Makino エイザンスマイレ
f. candida Hiyama シロバナエゾスマイレ
- V. Tokubuchiana Makino
var. tenuicornis F. Maekawa et Hashimoto ヒナスマイレ
f. variegata Makino フイリヒナスマイレ
- V. Selkirkii Pursh ex Goldie ミヤマスマイレ
- V. violacea Makino
var. Makinoi Hiyama ex F. Maekawa マキノスマイレ
- V. Sieboldi Maximowicz
subsp. Sieboldi フモトスマイレ
f. variegata F. Maekawa et Hashimoto フイリフモトスマイレ
- V. Maximowicziana Makino コミヤマスマイレ
- Sect. VAGINATAE W. Becker スミレサイシン節
- V. Bisseti Maximowicz ナガバノスマイレサイシン
- V. Rossii Hemsley アケボノスマイレ
f. lactiflora Hiyama ex F. Maekawa シロバナアケボノスマイレ
- Sect. FLAGIOSTIGMA Gordon ウスバスマイレ節
- V. blandaeformis Nakai ウスバスマイレ
- V. shikokiana Makino シコクスミレ
- Sect. NOMINIUM Gingins ニオイスマイレ節
- V. hondoensis W. Becker et Boissieu アオイスマイレ
- V. teshioensis Miyabe et Tatewaki エゾアオイスマイレ

V. *odorata* Linnaeus ニオイスマレ

Sect. TRIGONOCARPAE Gordon タチツボスマレ節

V. *acuminata* Ledebour エゾノタチツボスマレ

f. *purpurea* H. Koidzumi ムラサキエゾノタチツボスマレ

V. *grypoceras* A. Gray タチツボスマレ

f. *purpurellocalcarata* Hiyama ex F. Maekawa オトメスマレ

f. *albiflora* Makino シロバナタチツボスマレ

f. *pubescens* Mizushima ケタチツボスマレ

f. *variegata* Nakai アカフタチツボスマレ

f. *discolor* Nakai ウラベニタチツボスマレ

V. *obtusa* Makino ニオイタチツボスマレ

木曾谷のヒノキ林植生

横 内 文 人

F. Yokouchi: Chamaecyparis forest in Kiso District, Nagano
Prefecture

ヒノキはヒノキ科に属する常緑高木である。ヒノキといえば、たれしもすぐに木曾谷を思い出す。木曾谷のヒノキは「木曾の五木」の一つにも数えられ、歌われもされている。また良質の建築資材としてその利用度も高い。木曾のヒノキは古く江戸時代以前より、保護されてきた。それは「木一本、首一つ」の如く、極力伐採はまぬがれ、戦後も国有林として残され守られてきた。

私は、昭和37年より木曾谷の森林植生の調査をしてきたが、今回、それらをまとめて報告したいと思う。表題はヒノキ林の植生であるが、モミ、サワラ群落も含んでいる。資料のうち、三浦国